

# 大学生の友人関係における自己開示と孤独感の関係

竹内由美

## Self-disclosure and loneliness in college student friendship

Yumi TAKEUCHI

**【要旨】**本研究は、開示相手を親しい友人と一般的な友人、そして顔見知り程度の友人に分けて大学生の友人関係における自己開示の様相を探る。さらに、孤独感との関連を把握することで、どのような友人にどのような内容の開示をすることが孤独感低減に役立つかを明らかにする。大学生107名（男性51名、女性56名）に質問紙調査を行った。その結果、男性女性共に、同性に対する自己開示は、親友>友人>顔見知り程度の友人であったが、異性に対する自己開示は、友人>親友≒顔見知り程度の友人であった。量的な違いはあるが、開示しやすい側面と開示しにくい側面は、ほぼ同じ傾向であった。また、どの開示相手、どの開示側面においても同性>異性であった。男女の性差は、同性の親友・友人の開示量は男性<女性であり、異性の親友の開示量は女性<男性であった。孤独感との関係は、男性の場合、開示側面は違うが、同性の親友、同性の友人に開示している人ほど孤独感が低いことが分かった。女性の場合、同性の親友に開示している人ほど孤独感が低いことが分かった。同性の顔見知り程度の友人の場合は、開示している人ほど孤独感が高いことが分かった。

**【キーワード】**友人関係 (friendship)、大学生 (college student)、自己開示 (self-disclosure)、孤独感 (loneliness)

### 問題と目的

私たちは多種多様な人間関係の中で生きている。例えば、私たちが生まれる前からの関係である家族関係、子どものころから形成される友人関係がある。また、親密な関係として、恋愛関係があるだろう。加えて、学童期から形成される関係として先輩、後輩関係がある。このように人間関係は、家族、友人、恋人、先輩、後輩など様々あるが、本研究では青年期の友人関係に着目する。

友人関係は、一生を通じて大切なものであるが、青年期にもっとも重要な意味をもつ（遠矢、1996）。また岡田（2006）も、青年期は一生の友ができる時代であり、若者にとって、何より大事な人間関係だと述べている。では、なぜ、青年期に友人関係が重視されるのだろうか。遠矢（1996）によれば、幼児期や児童期では、両親やその他の重要な大人からの影響力が強く、規範と庇護のもとで生活している。しかし、青年期になると、これら既成の枠組みや規範をそのまま受け入れること

に抵抗をおぼえはじめ、ここから脱却し自立しようとする働きが目立つ。青年は、自分なりのあり方を模索し、両親よりも同世代の人間のいうことに共鳴し、同様の悩みを抱える仲間と深い結びつきができてくる。特に青年期の悩みや問題は、どちらかという大人には話しにくいことも多く、青年が悩みを打ち明けることができるのは、同じ悩みを抱える彼らの友人である。

青年は「自分を分かってくれるかどうか」ということを大切なこととして考え始め、親よりも友人に期待するようになる（松島、2004）。よって、不安定な青年の心の支えとなるのは、同世代の友人が重要であると考えられる。

青年期は、自分自身に対する関心が高まると共に、同一視をもたらすような深い友人関係を持つことを通して、新たな自己概念を獲得していく時期である。青年期の友人関係として、落合・佐藤（1996）は、浅い付き合い方から深い付き合い方へ変化し、次に広い付き合い方から狭い付き合い方へ変化することを指摘し

た。大学生の年齢になると、友達とは、本音を出して心を開いて話ができて、お互いに分かり合えるような付き合いをしようとしている。そのためには、自分を出していけるような友達を選ぶようになる。友達は単なる行動を共にする仲間ではなく、心理的な支えとなるような深いかわりをもつ相手になる。その相手には、似ているとか気が合うだけでなく、その根底には信頼があると考えられる。

友人との関係を一層親密で特別なものにするために最も重要なポイントは、自己開示であろう。自己開示とは、自分自身に関する情報を、本人の意思のもとに特定の他者に対して言語的に伝えることである(榎本、1997)。

人は自分のことをどのくらい友人に開示することができるのだろうか。例えば、自分の生い立ち、趣味、性格、恋愛や人間関係の悩み、進路の悩み、家族との葛藤、自分の自慢や欠点など、どのくらい立ち入ったことまで話することができるのだろうか。

本研究で着目する青年期は、身体的・性的にも心理・社会的にも子ども時代から大人になる過度期であり、多くの悩みを抱えやすい時期である。そのため、ごく親しい友人しか話せない悩みも増えてくるだろう。遠矢(1996)は、他の人には話さないがこの人には言えるという深い個人的内容の自己開示が、親密な友人関係に重要になると指摘している。

榎本(1997)も、自己開示の意義として、親密な人間関係を促進することをあげている。さらに、自己開示の動機として、①自己への洞察を深める、②胸の中にたまった情動を発散する、③孤独感をやわらげる、④自分をより深く理解してもらう、⑤不安を低減する、という5つを挙げている。

以上のように、自己開示の動機には5つあり、自分にとって重要な他者に十分に自己開示できるということは、健康なパーソナリティにとって必須の条件である。また、社会心理学者のジェラードも、自己を開示することは、精神的健康にもつながると述べている。

岡田(2007)は、現代の若者は友人が多い割に孤独であると述べている。その背景には、自分が努力したり熱中・集中している姿は、同世代から「かっこわるいこと」と思われているため、そうした姿を見せないで表面的に協調することが大事にされる傾向があるという。このような友人関係の特質を理解するためには、孤独感について理解することが重要である。

落合(1974)は、青年期は、他のどの年齢よりも孤

独感を感じやすい時期であり、児童期まで外に向けられていた視線を内面に向け、孤独感の中で自己を見つめる時期であると述べている。落合(1989)は、孤独感とは、自分はひとりであると感じることであると定義し、孤独感の構造が2次元であると定義している。①現実に関わっている人と理解・共感できると考えているかどうか、②個性性(人と代わることができない)に気づいているかどうか、の2つを挙げた。

落合(1989)は、青年期の孤独感は基本的感情であると述べ、コミュニケーションの一つである自己開示とどのように関わっているのかを明らかにする必要があるという。榎本・清水(1992)は、孤独感を共感性と個性性の2次元から捉え、青年期女子を対象に、親しい同性の友人、親しい異性の友人、一般的な友人について、自己開示と孤独感の関係を検討している。その結果、親しい同性の友人に対して、共感し合えると感じている者ほど、自己開示をよくするということが明らかとなった。親しい異性の友人、一般的な友人に対しては、親しい同性の友人ほど強くはないが、同様の結果が得られた。しかし、開示相手が誰であるかに関係なく、人間の個性性への気づきの度合によって、自己開示度が異なるということにはなかった。孤独感は、「人間はひとりである」という個性性の認識を獲得しているかどうかではなく、「人と人は分かりあえることができる」という共感性への信頼を獲得しているかどうかで自己開示度と関係しているようである(榎本、1997)。

以上より、榎本(1997)は、孤独感を1次元として捉え、大学生を対象に、父親、母親、親しい同性の友人、親しい異性の友人に対して自己開示と孤独感の関係を検討している。父親や母親に対する自己開示度は孤独感と関係ないが、友人特に同性の友人に対しては、自己開示を多くする人ほど孤独感を感じる数が少ないことを見出した。高木(2006)も、孤独感を1次元として捉え、大学生を対象に、保護者、同性の友人、異性の友人について、自己開示と孤独感の関係を検討している。その結果、保護者に対しては自己開示度と孤独感には関係が見られないが、友人に対しては自己開示を多くする人ほど孤独感を感じる数が少なく、このような傾向は、男子よりも女子において強く見られることを見出した。

こうした先行研究から、自己開示といっても両親に対する自己開示ではなく、親しい友人に対する自己開示が孤独感と関係しているようである。さらに、自己開示と孤独感の関係の強さの性差についても、単に、

男性よりも女性の方が強いというだけではなく、開示相手を、親友と一般的な友人以外にもっと細かく分けて検討すれば、自己開示度も異なり、孤独感にも差が出てくるのが分かるのではないと思われる。そこで本研究では、友人関係の開示相手を親しい友人と一般的な友人、そして顔見知り程度の友人に分けることで友人関係における自己開示の様相を探る。さらに、孤独感との関連を把握することで、どのような友人にどのような内容の開示をすることが孤独感低減に役立つかを明らかにする。

よって、本研究では、大学生の友人関係における自己開示の度合と孤独感との関わりに焦点を合わせ、以下の点を明らかにすることを目的とする。

- ① 同性・異性の親しい友人に対する自己開示の程度。
- ② 同性・異性の一般的な友人に対する自己開示の程度。
- ③ 同性・異性の顔見知り程度の友人に対する自己開示の程度。
- ④ 自己開示と孤独感との関係。

## 方法

**調査対象** 大学生107名（男性51名、女性56名）。平均年齢は男性20.4歳、女性20.3歳であった。

**調査期間** 2009年7月～10月

**手続き** 質問紙調査を行った（講義の終わり20分程度または休憩時間に質問紙を配布し無記名で回答してもらった）。

質問紙は、フェイスシートで性別、年齢、同性及び異性の親友と友人の有無を質問した。次に、自己開示尺度は、榎本が作成した自己開示質問紙（ESDQ）45項目を使用した。開示項目としては、15側面（知的側面・情緒的側面・志向的側面・外見的側面・体質機能的側面・性的側面・同性関係・異性関係・公的役割関係の側面・物質的自己・血縁的自己・実存的自己・趣味・意見・うわさ話）で、計45項目あり、1側面3項目ある。孤独感の測定は、ラッセルらによって作成された改訂版UCLA孤独感尺度を諸井（1991）が邦訳したものの20項目を使用した。最後に、親友と友人ではどのような違いがあるのかを質問し、自由に記述してもらった。

## 結果

### 1. 自己開示について

#### 1-1. 男性の同性に対する自己開示

同性の開示相手（親友・友人・顔見知り程度の友人）

に対する開示量を示したのがFigure 1である。

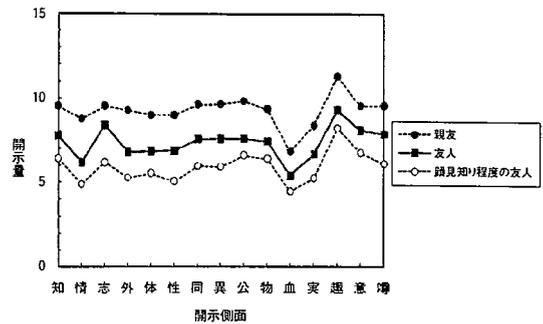


Figure 1 同性に対する開示量（男性）

同性の親友・友人・顔見知り程度の友人に対する開示量は、すべての開示側面で、親友>友人>顔見知り程度の友人であった。

開示側面については、親友・友人・顔見知り程度の友人のいずれにおいて、最も開示しやすい側面は趣味であった。友人、顔見知り程度の友人の時、趣味の次に開示しやすいのは、志向的側面、意見であった。親友の時、このような側面は、他の側面と同じくらいの開示量であった。

反対に開示しにくい側面は、親友・友人・顔見知り程度の友人のいずれにおいて、情緒的側面、血縁的自己、実存的自己などであった。また、顔見知り程度の友人に対して開示しにくいとされている側面は、外見的側面、体質機能的側面、性的側面などであった。

#### 1-2. 男性の異性に対する自己開示

異性の開示相手（親友・友人・顔見知り程度の友人）に対する開示量を示したのがFigure 2である。

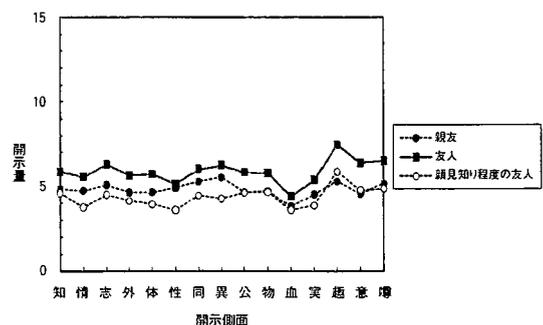


Figure 2 異性に対する開示量（男性）

異性の親友・友人・顔見知り程度の友人に対する開

示量は、すべての開示側面で、友人>親友≒顔見知り程度の友人であった。

開示側面については、親友の時、最も開示しやすい側面は異性関係であり、次に同性関係、趣味であった。友人・顔見知り程度の友人の時、最も開示しやすい側面は趣味であり、次にうわさ話、意見であった。

反対に開示しにくい側面は、親友・友人・顔見知り程度の友人のいずれにおいて、血縁的自己であった。親友の時、血縁的自己の次に開示しにくい側面は、実存的自己であり、友人、顔見知り程度の友人の時は、性的側面が開示しにくい側面であった。

### 同性に対する自己開示と異性に対する自己開示の比較

どの開示相手、どの開示側面においても同性>異性であった。

同性に対する自己開示は、親友>友人>顔見知り程度の友人であったが、異性に対する自己開示は、友人>親友≒顔見知り程度の友人であった。

量的な違いはあるが、開示しやすい側面と開示しにくい側面は、ほぼ同じ傾向であった。

### 1-3. 女性の同性に対する自己開示

同性の開示相手(親友・友人・顔見知り程度の友人)に対する開示量を示したのがFigure 3である。

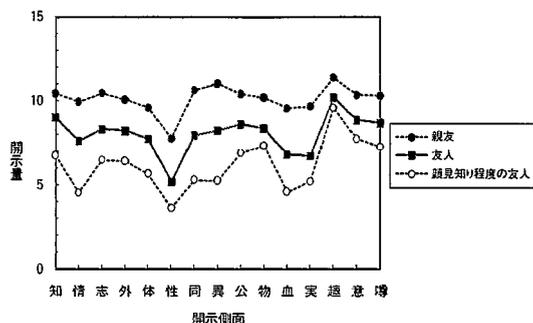


Figure 3 同性に対する開示量 (女性)

同性の親友・友人・顔見知り程度の友人に対する開示量は、すべての開示側面で、親友>友人>顔見知り程度の友人であった。

開示側面については、親友・友人・顔見知り程度の友人のいずれにおいて、最も開示しやすい側面は趣味であった。親友の時、趣味の次に開示しやすい側面は、異性関係、同性関係であった。友人の時、趣味の次に開示しやすい側面は、知的側面、意見であった。顔見

知り程度の友人の時、趣味の次に開示しやすい側面は、意見、物質的自己であった。開示相手が変わると、開示する内容も変わることが分かった。

反対に開示しにくい側面は、親友・友人・顔見知り程度の友人のいずれにおいて、性的側面であった。親友の時、性的側面の次に開示しにくい側面は、血縁的自己、体質機能的側面であった。友人の時、性的側面の次に開示しにくいのは、実存的自己、血縁的自己であった。顔見知り程度の友人の時、性的側面の次に開示しにくいのは、情緒的側面、血縁的自己であった。

### 1-4. 女性の異性に対する自己開示

異性の開示相手(親友・友人・顔見知り程度の友人)に対する開示量を示したのがFigure 4である。

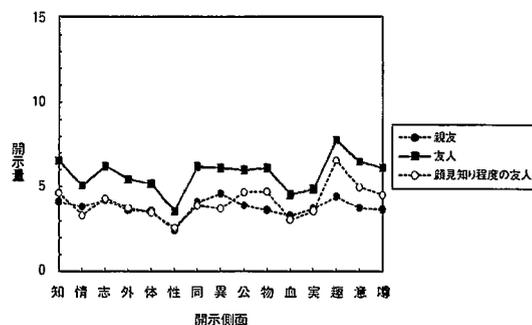


Figure 4 異性に対する開示量 (女性)

異性の親友・友人・顔見知り程度の友人に対する開示量は、すべての開示側面で、友人>親友≒顔見知り程度の友人であった。

開示側面については、親友の時、最も開示しやすい側面は、異性関係であり、次に趣味、志向的側面であった。友人の時、最も開示しやすい側面は、趣味であり、次に知的側面、意見であった。顔見知り程度の友人の時、最も開示しやすい側面は、趣味であり、次に意見、物質的自己であった。

反対に開示しにくい開示側面は、親友・友人・顔見知り程度の友人のいずれにおいて、性的側面であり、次に開示しにくい側面は、血縁的自己であった。

### 同性に対する自己開示と異性に対する自己開示の比較

どの開示相手、どの開示側面においても同性>異性であった。

同性に対する自己開示は、親友>友人>顔見知り程度の友人であったが、異性に対する自己開示は、友

大学生の友人関係における自己開示と孤独感の関係

人>親友≒顔見知り程度の友人であった。  
量的な違いはあるが、開示しやすい側面と開示しにくい側面は、ほぼ同じ傾向であった。

の開示量は、男性<女性であった。他の開示側面では、差はなかった。

2. 孤独感について

男女の性差

同性の親友・友人の開示量は男性<女性であった。一方、異性の親友の開示量は女性<男性であった。開示側面別に見ると、同性の親友の時、血縁的自己

自己開示の開示側面と孤独感の関係において相関係数を算出した。男性の相関係数をTable 1に示す。女性の相関係数をTable 2に示す。男性の場合、同性の親友の時、孤独感は、志向的側

Table 1 自己開示と孤独感の相関係数 (男性)

側 面	開 示 相 手					
	同性の親友	同性の友人	同性の顔見知り 程度の友人	異性の親友	異性の友人	異性の顔見知り 程度の友人
知的側面	-.25	-.21	-.07	-.14	-.06	-.01
情緒的側面	-.15	-.04	-.07	-.09	.01	-.10
志向的側面	-.41 **	-.23	-.21	-.14	-.19	-.05
外見的側面	-.04	-.03	-.03	-.11	-.04	-.03
体質機能的側面	-.24	-.05	-.10	-.10	-.08	-.03
性的側面	-.27	-.06	-.04	-.06	-.08	-.02
同性関係	-.19	-.31 *	-.14	-.12	-.02	-.01
異性関係	-.31 *	-.22	-.14	-.12	-.01	-.03
公的役割関係の側面	-.23	-.13	-.07	-.09	-.08	-.03
物質的自己	-.21	-.28	-.21	-.12	-.19	-.06
血縁的自己	-.10	-.09	-.24	-.12	-.20	-.12
実存的自己	-.35 *	.00	-.05	-.11	.00	-.09
趣 味	-.22	-.30 *	-.11	-.13	-.13	-.13
意 見	-.33 *	-.17	-.10	-.12	-.03	.00
うわさ話	-.21	-.15	-.03	-.08	-.03	.13

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

Table 2 自己開示と孤独感の相関係数 (女性)

側 面	開 示 相 手					
	同性の親友	同性の友人	同性の顔見知り 程度の友人	異性の親友	異性の友人	異性の顔見知り 程度の友人
知的側面	-.17	-.09	.06	-.37 **	.03	-.12
情緒的側面	-.28 *	-.10	.12	-.29 *	.01	-.07
志向的側面	-.25	.01	.05	-.35 **	.00	-.09
外見的側面	-.17	-.10	-.05	-.31 *	.04	-.02
体質機能的側面	-.24	-.16	.10	-.30 *	-.05	.01
性的側面	-.24	.07	.28 *	-.35 **	.12	.02
同性関係	-.18	.15	.11	-.33 *	.16	-.03
異性関係	-.23	.02	.10	-.30 *	.11	-.02
公的役割関係の側面	-.26	-.07	-.04	-.36 **	-.02	-.12
物質的自己	-.29 *	-.21	-.13	-.35 **	-.13	-.24
血縁的自己	-.14	.06	.33 *	-.25	.11	.01
実存的自己	-.01	.17	.23	-.27 *	.21	-.07
趣 味	-.32 *	-.22	-.12	-.34 **	.05	-.20
意 見	-.25	-.13	-.16	-.34 *	-.02	-.15
うわさ話	-.14	-.08	-.01	-.26	.12	-.04

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

面、異性関係、実存的自己、意見と負の有意な相関があった。つまり、志向的側面、異性関係、実存的自己、意見を開示している人ほど孤独感が低いことが分かった。また、同性の友人の時、孤独感、同性関係、趣味と負の有意な相関があった。つまり、同性関係、趣味を開示している人ほど孤独感が低いことが分かった。

同性の顔見知り程度の友人の時、異性の親友の時、異性の友人の時、異性の顔見知り程度の友人の時では、自己開示と孤独感の間では有意な相関を示さなかった。

女性の場合、同性の親友の時、孤独感、情緒的側面、物質的自己、趣味と負の有意な相関があった。つまり、情緒的側面、物質的自己、趣味を開示している人ほど孤独感が低いことが分かった。同性の顔見知り程度の友人の時、孤独感、性的側面、血縁的自己と有意な正の相関を示した。つまり、性的側面、血縁的自己を開示している人ほど孤独感が高いことが分かった。ここで、同性の顔見知り程度の友人との開示に着目すると、性的側面、ならびに血縁的自己において孤独感と関連が認められた。

しかしながら、性的側面の合計得点（1点から12点の幅）は平均値が3.61、標準偏差が1.26となっており、また、血縁的自己の合計得点（1点から12点の幅）も平均値が4.57、標準偏差が2.02となっており、分布が偏っている可能性が認められた。そこで、それぞれの分布を確認したところ（Figure 5）、分布が偏っていることが明らかになった。よって、相関分析の結果は信頼性に欠ける可能性があることが分かった。

そのために、ノンパラメトリック検定（分布が偏っている場合に行う検定）である $\chi^2$ 検定を行うために、クロス集計表を用い、以下のような手続きによって検討した。まず、孤独感の合計得点（ $M=40.16, SD=9.67$ ）をもとに、孤独感低群（ $M=32.18, SD=4.76, N=28$ ）と孤独感高群（ $M=48.14, SD=5.96, N=28$ ）に分類した。そして、孤独感の高さ(2)×性的側面の合計得点(5)、孤独感の高さ(2)×血縁的自己の合計得点のクロス集計(8)を行い（Table 3）、 $\chi^2$ 検定を実施した。その結果、 $\chi^2$ 検定は有意ではなかった。このことから、性的側面と血縁的自己については、関連は認められないと考

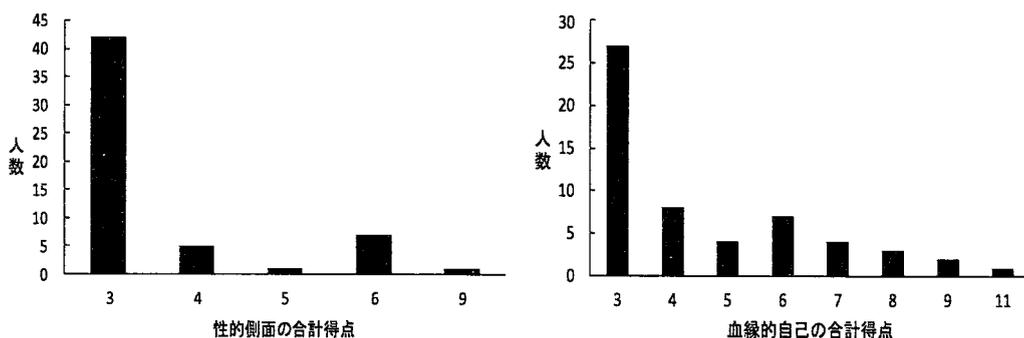


Figure 5 性的側面、血縁的自己の分布

Table 3 孤独感高低別の性的側面、血縁的自己の度数分布表

		性的側面合計得点											
		3	4	5	6	7	8	9	10	12	13	14	合計
孤独感	低	23	3	0	2			0					28
	高	19	2	1	5			1					28
合計		42	5	1	7			1					56
		血縁的自己合計得点											
		3	4	5	6	7	8	9	10	12	13	14	合計
孤独感	低	17	3	3	2	1	2	0		0			28
	高	10	5	1	5	3	1	2		1			28
合計		27	8	4	7	4	3	2		1			56

えることができる。また、補足的ではあるが、クロス集計表を見ても、開示得点が高いほど孤独感低群の人数は増えていなかった。

異性の親友の時、孤独感は、情緒的側面、志向的側面、外見的側面、体質機能的側面、性的側面、同性関係、異性関係、公的役割関係の側面、実存的自己、趣味、意見と負の有意な相関があった。つまり、情緒的側面、志向的側面、外見的側面、体質機能的側面、性的側面、同性関係、異性関係、公的役割関係の側面、実存的自己、趣味、意見を開示している人ほど孤独感が低いことが分かった。同性の友人の時、異性の友人の時、異性の顔見知り程度の友人の時では、自己開示と孤独感の間では有意な相関を示さなかった。

## 考 察

本研究は、大学生を対象に、同性・異性の親友、友人、顔見知り程度の友人に対する自己開示の程度はどのようなものか、そして自己開示と孤独感との関係はどのようなものかを検討することであった。

まず、開示量についてであるが、同性の親友・友人・顔見知り程度の友人に対する開示量は、男女ともに、すべての開示側面で、親友>友人>顔見知り程度の友人であった。自由記述にも、親友とは、本音で何でも語り合える存在であるが、友人は、気を遣い少し距離を感じてしまう存在であると答えている者が多かった。このことから、心理的に距離の近い人ほど自己開示しやすいことが考えられる。一方、異性の親友・友人・顔見知り程度の友人に対する開示量は、男女ともに、すべての開示側面で、友人>親友≒顔見知り程度の友人であった。異性の親友というのは、特別な仲であり、その関係を維持持続させようと思うと、友人に対する開示よりも多くの側面に気を遣うということではないだろうか。榎本(1997)は、最も開示しやすいのは親しい友だちという結果が得られており、同性の部分では本研究と一致しているが、異性の部分では一致しているとは言えない。今後、同性と異性の親友・友人の違いについて詳細に検討する必要があるだろう。

次に、同性と異性の開示量については、男女ともに開示量が同性>異性であった。榎本(1997)の研究から、同性・異性の親しい友人に対しては、同性の方が異性よりも開示量が多いという結果が得られ、本研究と一致していると言えるだろう。男性の場合、孤独感の関係から見ると、異性に開示をしても孤独感は埋め

られないことが見出されたが、同性の親友、友人に対してのみ、開示側面の種類は異なるが孤独感を埋める存在であることが見出された。まず、同性の親友に対しては、目標や社会に対する意見、恋愛について開示することで孤独感を埋める。同性の友人に対しては、友人関係のことや、趣味を開示することで孤独感を埋める。このことから、男性は同性に開示をした方が、孤独感を埋めることが可能であることが明らかになった。一方、女性の場合は、異性の友人、顔見知り程度の友人に開示をしても孤独感は埋められず、異性の親友に対して開示をすることで孤独感を埋めることが見出された。ゆえに、女性にとって、異性の親友は特別な存在であることが考えられる。異性の親友が恋人に近い人または、恋人として受け止められていた可能性があるが、本研究ではこの点は明らかにできないため、今後の課題となろう。

さらに、本研究で興味深い結果は、女性の場合の自己開示と孤独感の関係である。女性は同性の親友に対して一番多く開示をしていることが本研究で明らかとなったが、孤独感との関係を見ると、同性の親友よりも異性の親友に開示をした方が孤独感を埋めることが見出された。何でも話せる異性の親友がいることが、女性にとって重要なことだと思われる。そして、同性の親友では、情緒的なものという深い部分と日常生活における浅い部分の両側面を開示することで孤独感を埋めることが見出された。同性の親友は、常に一緒にいて行動を共にする相手として捉えることができ、日常生活の中で一緒にいる相手だからこそ多様な側面を開示することができるものであり、気のおけない存在であると考えられる。

男女の性差として、開示相手が同性の時、親友・友人の開示量は男性よりも女性の方が多かったが、顔見知り程度の友人では、差はなかった。一方、開示相手が異性の時、親友の開示量は女性よりも男性の方が多かったが、友人・顔見知り程度の友人では、差はなかった。ジェラードが自己開示度の研究を行って以来、男性よりも女性の方が開示をするという結果は、多くの研究で確認されている(榎本、1997)。本研究では同性の場合(親友・友人)のみ同様の結果が得られた。同性と異性では、友人関係の関わり方に違いがあると思われる。開示側面別に見ると、同性の親友の時、血縁的自己の開示量は男性よりも女性の方が多かった。他の開示側面では差はなかった。榎本(1997)の研究から、親しい友だちに対する自己開示については、性

的側面を除く多くの側面で女子の方が開示量が多いという結果が得られている。本研究では、多くの側面ではなく血縁的自己だけが女性の方が開示量が多いという結果が得られ、他の開示側面は男女差はなかった。本研究と先行研究は一致していないため、今後、詳しく検討する必要がある。

次に、開示しやすい側面についてであるが、男女ともに、開示相手に対して開示しやすいのは、趣味であった。榎本(1997)の、趣味が開示しやすいという結果と同様の結果が得られた。趣味は相手との心理的距離に左右されるものではないと言える。趣味は、間をもたせるための役割を持っており、どのような相手に対しても話しやすい側面である(榎本, 1997)。また、岡田(2007)は、お互いに傷つけあわないように、表面的な関係を取ることで満足している一群の青年がいると指摘し、彼らは表面的な関係を保つために浅い内容を話すことが多いとも言っている。さらに、顔見知り程度の友人にとって趣味とは、自分のことを知ってもらうための自己紹介の役割を持っていると考えられる。

反対に、開示しにくい側面は、男女ともに、性的側面、血縁的自己であった。榎本(1997)の、性的側面、血縁的自己が開示しにくいという結果と同様の結果が得られた。開示しにくい理由として、榎本(1997)の自己開示難易度の研究において、性的側面、血縁的自己の自己開示難易度が高いことが知られている。血縁的自己の側面が開示しにくいのは、家族についての心配事を、家族に話すのは妥当なことであるが、家族についての心配事を友人に話すのは、有益な助言が得られるかもしれないが、家族の問題を表に出すことは恥ずかしいことであると考えられるため、開示しないのではないかと思われる。

今後の課題は、以下の3点である。

まず、開示量は、同性の場合、親友>友人>顔見知り程度の友人であり、異性の場合、友人>親友≒顔見知り程度の友人であった。先行研究では、親しい友だちが開示しやすいとされている。同性の場合は一貫しているが、異性の場合は一貫していない。今後、同性と異性の親友・友人の違いについて詳細に検討する必要がある。

次に、同性と異性の開示量の比較から、孤独感の関係をを見ると、女性の場合、異性の親友が特別な存在で

ある可能性が示唆された。このことから異性の親友が恋人に近い人であると考えられるが、本研究では明らかにできないため、今後検討する必要がある。

男女の性差として、開示相手が同性の時、親友・友人の開示量は男性よりも女性の方が多かった。一方、開示相手が異性の時、親友の開示量は女性よりも男性の方が多かった。同性と異性では、友人関係の関わり方に違いがあると考えられるため、今後検討する必要がある。開示側面別に見ると、同性の親友の時、血縁的自己の開示量は、男性よりも女性の方が多かった。他の開示側面では性差はなかった。榎本(1997)の研究からは、多くの側面で女子の方が開示量が多いという結果が得られている。本研究と一致していないため、今後詳しく検討する必要がある。

## 引用文献

- 榎本博明・清水弘司(1992). 自己開示と孤独感 心理学研究、63、114-117.
- 榎本博明(1997). 自己開示の心理学的研究 北大路書房
- 松島るみ(2004). 青年期における自己開示を規定する要因の検討 風間書房
- 諸井克英(1991). 改訂UCLA孤独感尺度の次元性の検討 静岡大学文学部人論集、42、23-51.
- 岡田 努(2006). 家族と友人 白井利明(編)よくわかる青年心理学 ミネルヴァ書房
- 岡田 努(2007). 現代青年の心理学 — 若者の心の虚像と実像 世界思想社
- 落合良行(1974). 現代青年における孤独感の構造 (I) 教育心理学研究、22、162-170.
- 落合良行(1989). 青年期における孤独感の構造 風間書房
- 落合良行・佐藤有耕(1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究、44、55-65.
- 高木浩人(2006). 大学生の自己開示と孤独感の関係 — 開示者の性別、開示相手、開示側面の検討 — 愛知学院大学心身科学部紀要、2、53-59.
- 遠矢幸子(1996). 友人関係の特性と展開 大坊郁夫・奥田秀宇(編) 親密な対人関係の科学 誠信書房 Pp.89-116.